

「神戸事件を考える」正誤表 （令和8年8月末現在）

No	頁	段	行	現在の表記	修正後の表記
1	3	下	15	イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、イタリア、デンマーク	イギリス、フランス、アメリカ、 <u>オランダ</u> 、ドイツ、イタリア、デンマーク
2	22	下	4～6	[ドイツ公使の見た明治維新・一三〇]によれば、各国公使に危険が迫った場合、フランス公使館に集合することが事前に取り決められていた。また、自国の船を使えないドイツ、イタリア、オランダの公使団はアメリカ船で移動することになったことも記されている。	[「ファルケンバーグよりシュアード国務長官への報告一八六八年二月三日付」遠い崖・一七九]によれば各国公使に危険が迫った場合、フランス公使館に集合することが事前に取り決められていた。また、自国の船を使えないドイツ、イタリア、オランダの公使団はアメリカ船で移動することになった（[ドイツ公使の見た明治維新・一三〇]）。
3	44	下	5-6	生捕ニ相候由	生捕ニ逢候由
4	48	上	15	外人余ヲ護衛シテ	外人予ヲ護衛シテ
5	58	上	12	六五九一六六一	六五九一六六〇
6	68	上	14	英仏委員会は	英仏委員は
7	68	上	22	初代イタリア大使	初代イタリア <u>公使</u>
8	71	下	15～16	申演難し、近日中、	申演難し、近日 <u>の</u> 中、
9	79	上	14	アメリカ大使館	アメリカ <u>公使館</u>
10	87	下	9	瀧氏	瀧氏
11	108	下	7	桑名港	桑名
12	108	下	17-18	組支配之物江	組支配之 <u>者</u> 江
13	113	上	4	浜辺ニ居候異人打候よし	浜辺ニ居候異人為打候よし
14	114	上	10	イギリス大使館	イギリス <u>公使館</u>
15	114	下	17	旦那様ニ御伝承畏の上	旦那様ニ御伝承畏の上
16	134	上	19	能福寺	永福寺
17			21	能福寺	永福寺
18		下	1	能福寺	永福寺
19			7	能福寺	永福寺
20	135	上	1	能福寺	永福寺
21	135	上	5	能福寺	永福寺
22	139	下	5	大光院	大行院

No	頁	段	行	現在の表記	修正後の表記
23	142	下	9	初代の駐日英国大使	駐日英国 <u>公使</u>
24	143	上	13	技師	技手
25	146	下	21	大正六年十一月	大正六年十一月 <u>旦</u>
26	151	下	1-2	バルマーは[描かれた幕末明治・一六九]の記述	バルマーは[神戸開港百年史 建設編・五七]の記述
27	153	下	19-20	「備前兵・・・」	「備前 <u>藩</u> ・・・」
28	157	下	7	（[復古記・四九三]）	（[復古記・四九 <u>二</u>]）
29	160	上	11	可能背	可能性
30	164	上	20-21	「旗本領代官」	「旗本領代官所役人」
31	169	上	17	米国大使館	米国 <u>公使館</u>
32	174	下	22	一外交官の見た明治維新・一三二	一外交官の見た明治維新・一三三
33	175	下	16	ロッシー	パークス
34	177	下	3	木戸や五代に送り	木戸に送り
35	183	上	13	二月三十日より元治元年	二月三十日より元治元年
36	200	下	7	井上金蔵日記	瀧善三郎神戸事件 井上金蔵日記抜萃
37	201	下	19	軍艦	軍監
38	208	上	12-13	大阪城の焼失にふれて	書面を見て
39	225	上	4	篠岡八郎が記した[改写 瀧・・・	篠岡八郎が記した <u>もの</u> を写したとされる[改写 瀧・・・
40	253	下	17	その前にキャリエールが「キャリエールは	その前に「キャリエールは
41	282	下	4	⑩同十四年	⑩同十六年
42	282	下	14	[神戸事変と瀧善三郎]としているが	[神戸事変と <u>瀧</u> 善三郎]としているが
43	283	下	23	（平成四年）	（平成 <u>六</u> 年）
44	303	下	5-8	きのふみし夢ハ今さら引可へ帝神戸のうらに名おやな可さむ 【正信辞世】 きのふみし夢ハ今さらひき可へて神戸のうらに名おやな可さむ	【正信辞世】 きのふみし夢ハ今さら引可へ帝神戸のうらに名おやな可さむ
45	305	上	14	〔十〕	〔十一〕
46	305	下	5	「のこさん」	「 <u>なが</u> さん」
47	307	上	8-9	という <u>という</u>	という
48	311	上	9	義魂忠魄	義魂忠魂

No	頁	段	行	現在の表記	修正後の表記
49	314-315	下上	271	なお、「〔荻野流〕国史大辞典 第三巻・七六五」では、岡山との関係は確認できない。	この行削除 ※[「荻野安重」国史大辞典 第二巻・七八四]に、岡山との関係の記載がある。
50	320	上	5	津田孫兵衛書簡（慶応四年）辰正月廿四日酉の宮より早朝達	二月八日板津武司、津田孫兵衛差出しの書簡
51	359	下	4	吉備温故秘録／大沢市大夫惟貞輯録	吉備温故秘録／大沢市大夫惟貞輯録
52	362	下		(追加)	◎神戸市史 第二輯 第一冊／神戸市編発行／昭和十二年（確認日：2026/08/26） https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1117502/1/3
53	364	上	6	●御奉公之品書上 瀧猛水（池田家 D3—1597）	削除※[先祖書 瀧猛水]と重複。先祖書が正しい。
54	368	下	8-10	同展の出陳目録中の「神戸一件記録」（所蔵あるいは出陳「池田侯爵家」）に「同藩記録掛の録せるもの。」という記述があり、同書であると思われる。	同展の出陳目録中の「瀧善三郎神戸一件」（所蔵あるいは出陳「池田侯爵家」）が同書であると思われる。
55	371	上	18	郷国事務局	郷国事局
56	371	下	2	/雄山閣出版/二〇〇二	/雄山閣出版/二〇二二
57	371	下	13	F.Ə.ディキンズ	F.V.ディキンズ

※判読に支障のない範囲の誤字・脱字や、記号・句読点の重複等については割愛しています。

発行後に確認した資料により、本書で記述した以外の説があることを確認したもの、また本書では説明不足であった事柄を補足として記録する。

【補足1】新往還の廃止時期について

p273で[岡山県上道郡古都村史・128]を根拠として「慶応三年四月に新往還は廃された」と記述したが、[永代御用留（明治編）・113]には明治2年においても往還宿が機能していたことを示唆する記事が見られる。往還の廃止時期に関しては確定な判断を下せず 今後の再調査・検討が必要である。本稿では往還廃止に関する記述は削除する。

※永代御用留（明治編）／大月滋敏編／二版／赤磐市立中央公民館・古文書を読む会／2014

【補足2】徳川慶喜への召喚命令と外国伝達について

p.14において「徳川慶喜に王政復古を外国公使に伝えさせること」という記述は、[伊達宗城在京日記・621—622]および[復古記・402—403]に基づくものである。しかし、伊達日記が「王政復古二付早々外国人へ其趣申通候様

徳川氏へ可被仰渡」と記すのに対し、[復古記]では「徳川慶喜ヲシテ召命ヲ各國ニツタエセシメ」とあり、伝達内容の趣旨がやや異なる。また、他の史料では慶喜の召喚理由を「弁明のため」とする記述も見られる。実態の確認にはさらなる検証が必要であるため、前述の表現は一旦保留とし、現時点では諸説・両論併記にとどめる。

【補足3】伊達宗城・三条実美と日置帯刀の会見日について

本書p.188の注359では『伊達宗城在京日記』（pp.672-673）を引用元として「同人から十三日に京都で三条実美と一緒に聞いた話を報告した」と記述した。しかし、引用頁では会見日を「12日」としているが、同日は日置は上京途上であり、会談は成立しない、日記の13日（p666.当日の記録）に実際の会見が記録されている。これらのことから伊達の記憶違いだと推察して、「13日」と記述した。この判断の経緯を注記として補足しておくべきであった。

【補足4】外国事務局人事の典拠および職階の表記について

p.201の注473では出典を「同前」としていたが、正しくは[復古記 第二冊・433]を参照している。直前の注472は[復古記・798-799]を参照しており、同じく三職八局発足に関する記述であるが、人事については記されていない。訂正する。なお、[復古記 第二冊・433]では東久世は外国事務局の「輔」とされているが、[「三職八局職制ニ関スル布告」大日本外交文書・130]及び[「明治元戊年二月第七三」法令全書 慶応三年—明治元年・30]では、肥前少将（鍋島直正）とならび権輔とされている。これら記述の齟齬を補記しておきたい。

【補足5】（岡山県士族日置忠勤王記事について）

p.280では池田家文庫S6-115を参照して、「内容から帯刀目録の可能性は低いと思われる」としたが、その後、転写元と思われるD3-3329を確認したところ、署名捺印が確認された。したがって、現在は自筆である可能性が高いと考えている。

【補足6】榊屋の表記について

『兵庫一件始末書上』および『兵庫日記』において、沢井の筆跡（文字）は「舛屋」と読める。しかし、同史料を含め神戸関連の諸史料を確認した範囲では、一般に「榊屋」と記されている。本書では他史料との整合性を考慮して「榊屋」の表記を採用したが、その選定理由に関する記述を欠いていたため、ここに付記する。

【補足7】「復古記」「防長回天史」復刊に関する記述について

マツノ書店に確認すると、東京大学出版会が復刊して、同書店が販売しているということであったが、東京大学出版会のサイトでは現在も品切れである。この状況を明確にするには更なる調査が必要であるが、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できることを踏まえて、同書店が扱っていることに関する記事は本書で記載しないこととして、削除する。「防長回天史」に関するマツノ書店に関する記述も同じく削除する。

【補足8】第二次東禅寺事件について

本文258頁下段において「外国人を殺傷した凶行であるが、勤務中ではなく、また単独犯である」と記述していた。これは『松本市史 第2巻 歴史編 2』（830頁）等の「東禅寺へ忍び込み」という記述等を参考にしたのであるが、当時の勤務状況（勤務中か非番か）については視点や史料による違いがあり、諸説存在することが確認された。いずれの説を採るかについては別途調査が必要であるため、ここでは「勤務中ではなく、」という記述を削除することとした。

【補足9】安政7年のオランダ人殺害について

「本文210頁注578で、[暗殺の幕末維新・23]を典拠に「同年二月、オランダ商船の船長二名が殺害された」と記述したが、ウィキペディアでは「船長と商人」とする。[ポルスブルック日本報告・113]及び「一外交官の見た明治維新・61」（学術文庫版）では、二人の船長と読める。正誤表発送時点ではいずれとも確定できていない。